

台湾の昔話

施翠峰編著



第5卷

世界民間文芸叢書

台湾の昔話

施翠峰編著



第5卷

世界民間文芸叢書

著者略歴

シ フウイ フオン
施 翠 峰

1950年国立台湾師範大学美術科卒業。

国立芸術短大美術工芸科主任・文化学院大学部美術学系主任教授・華岡博物館館長等歴任。現在華岡永久教授・台湾省政府文献委員会委員。

著書 「台湾風土と生活」,「翠峰芸術論叢」,「現代美術思潮導論」,「台湾神話・伝説集」,「南海展痕」その他訳著書合計三十三種。

台湾の昔話

世界民間文芸叢書

昭和52年 1月20日 初版発行

第5回配本

定価1800円

編 著 者

施 翠 峰

発 行 者

吉 田 栄 治

印 刷 所

栄 泰 印 刷

発 行 所

三 弥 井 書 店

〒108 東京都港区三田3—2—6

電話03-451-9540振替東京9-21125

目次

第一部 台湾の昔話…………… (7)

凡例

昔話採集地図

道徳話…………… (10)

一 笛の音…………… (10) 二 鬼の善行…………… (15)

三 女乞食…………… (19) 四 醜婦しづめが美人になった話…………… (23)

五 恩知らずのむこ…………… (27) 六 孝行ものと不孝もの…………… (30)

七 李五長者と旅人…………… (35) 八 銀の煉瓦…………… (41)

九 蛇酒…………… (47) 一〇 人參採り…………… (49)

一一 善行…………… (52) 一二 蟻の恩返し…………… (54)

一三 猫と質屋…………… (56) 一四 阿福アキと虎…………… (59)

一五 むこ選び…………… (61) 一六 熊のおしえ…………… (64)

一七 三人の兄弟…………… (65) 一八 蛇郎君へびおに…………… (67)

笑話…………… (75)

一九 三人の近眼…………… (75) 二〇 金拾い…………… (77)

二一 物は見かた

(79)

二二 愚かなむこさん

(81)

二三 笑死千万

(84)

二四 宝物

(88)

二五 猿廻し

(92)

二六 牛泥棒

(95)

二七 閻魔さまへのお願い

(97)

二八 呑気ものと短気もの

(99)

二九 丑年生れ

(101)

三〇 愚かな泥棒

(103)

三一 嫉妬深い男

(106)

三二 塩魚

(107)

三三 借金

(109)

三四 三叔公
サンゾウモコウ

(110)

三五 仏さまと鐘

(112)

三六 金の卵

(114)

知恵話

三七 めすまれた鶏

(116)

三八 嘘つき七仔
チイア

(119)

三九 賢い子供

(128)

四〇 虎姑婆
オウコウババ

(133)

四一 似合いの夫婦

(137)

四二 来月の五日

(140)

四三 七兄弟

(142)

四四 鶏卵

(148)

四五 機智にとんだ県官

(150)

四六 狸のおじいさん

(152)

四七 大人国

(154)

四八 傲慢な金持さん

(158)

動物話

四九 獅子の皮

(161)

五〇 自慢くらべ

(162)

五一 亀の昇天

(163)

五二 子羊と狼

(165)

目 次

五三	自由を求めて	(166)	五四	鬼の洞穴	(168)
五五	驢馬と神様	(169)			
宿命話					
五六	運命	(171)	五七	慰かな息子	(176)
五八	蛙物語	(183)	五九	運命のいたずら	(190)

怪異話					
六〇	百足	(194)	六一	しじみの精	(199)

六二	えびの皮	(201)	六三	小人の国	(205)
----	------	-------	----	------	-------

六四	花嫁のわざわい	(207)	六五	冬瓜	(209)
----	---------	-------	----	----	-------

第二部 高砂族の昔話					
(215)					

凡 例

高砂族十種族分布図

タイヤル族					
(218)					

六六	巨人	(218)	六七	熊と豹	(219)
----	----	-------	----	-----	-------

六八	シュルマ社	(220)	六九	恐ろしい齒	(222)
----	-------	-------	----	-------	-------

サイセツト族					
(224)					

七〇	水中の妻	(224)	七一	ロボゴの最後	(227)
----	------	-------	----	--------	-------

アミ族		(229)
七二 サワのさすらい物語		(229)
ブヌン族		(236)
七四 粟の種		(236)
ツオウ族		(238)
七五 蛙の精		(238)
七七 蛇の子		(240)
ルカイ族		(242)
七八 猿と穿山甲 せんざんこう の争い		(242)
八〇 豹と熊		(247)
八一 とかげと蝦の争い		(249)
パイワン族		(251)
八二 亀		(251)
八三 イツ漂流記		(253)
ピューマ族		(255)
八四 大風 おまた		(255)
八五 美女の災難		(257)
解説		(259)
台湾昔話の内容とその推移について		(260)
一 台湾昔話と中国大陆との関係		(261)
二 台湾昔話の発掘		(261)
三 台湾昔話の内容と分類		(271)
四 台湾昔話と大陸昔話との差異		(271)

目 次

五 台湾昔話の将来	(275)
高砂族昔話の内容について	
一 高砂族口承文学の中における昔話	(276)
二 神話から昔話への推移	(278)
三 広い人間性の発露	(280)
収録昔話の語型対照表	
原語対訳	(289)

第一部

台湾の昔話



(台湾の寺廟の門に描かれている「門神」)

凡 例

一 この第一部に収められた六五話は、完成度が高く、読物としても面白く、時代背景や大衆心理がよく反映されているものを選んだ。

二 過去ほかの編者によって書物にかかれた昔話も、原型を確保するいみで、やはり原地で直接採集してからのせた。

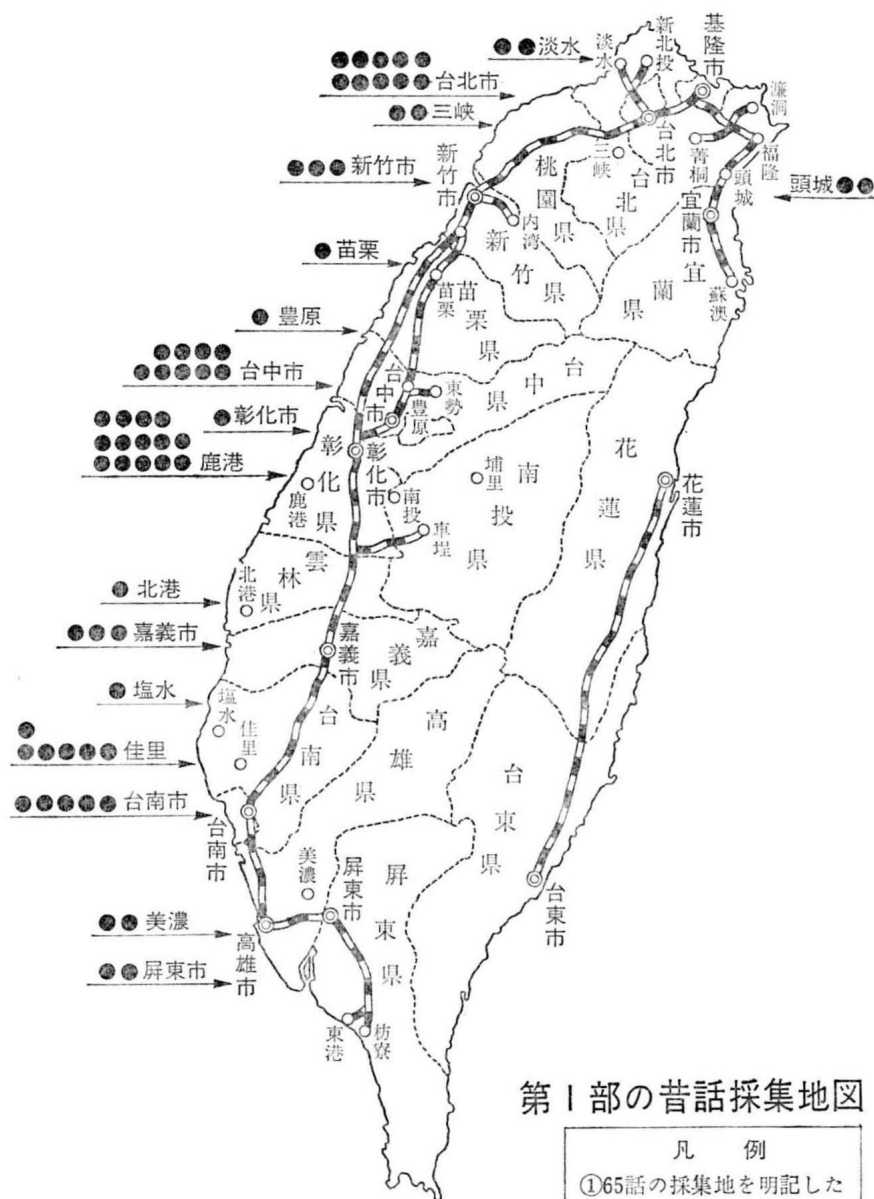
三 清の時代から台湾に伝わって来たもので、長年のあいだ、台湾の郷土性が加わったものは、比較研究の資料としていたが、全然母型のまゝで伝わっているものは、全部避けた。

四 戦後大陸本土から移住して来た人たちの間に伝わっている昔話は、採集の対象にしないかった。

五 なるべく幅広いテーマのものを選び、同じような内容の作品が重ならないようにした。

六 採集の時に耳にはいったのは全部台湾語なので、自然に台湾の成語・諺が多かった。直譯では日本語にならないから、できるだけ原意を生かして、日本語にかきかえた。ぎこちなくなつた箇所も多くあろう。

七 漢字のわきに片仮名をつけたのは、台湾語の発音を示した。



道徳話

一 笛の音

むかし、あるところに二人の兄弟が住んでいました。弟はまだ幼い頃、父母を亡したので、その頃は、兄夫婦の世話になっていましたが、いつも兄嫁にいじめられてばかりいました。

ある日、兄嫁は夫をそそのかして、弟を自分の家から追い出そうと企みました。優柔不断な夫は、兄弟のよしみを忘れ、自分の妻の計略通りに、弟をつれて、舟をこいである離れ島までいきました、そして弟をそこに残すと、うそをついて、そのまゝ舟をこいで家に帰ってしまいました。

弟は策略とは知らずに、てっきり兄さんがまた舟をこいで迎えに来るだろうと思って待っていました。が、いくら待っても兄の姿がみえません。やがて太陽が西の海の中へ沈みました。弟はこわさのために、とう／＼泣き出しましたが、いくら泣いても呼んでも、誰も返事してくれる者はいません。

離れ島の山の中で一夜をあかした弟は、翌日太陽が出て来ると、また海辺に出て、兄さんはいない。今日は今日舟をこいで迎えに来るかもしれないと精いっぱい希望を抱いて、遙か遠い海のかなたを

見守っていましたが、この日もまた失望の中に日が暮れてしまいました。

この時、弟ははじめてふだん兄嫁の自分に対するひどい仕打ちを思い出して、これはきつと自分を家から追い出すための仕業だろうと気付きました。

こう考えると弟はもう兄さんが迎えに来ることはあり得ないことを悟り、こうなった以上、自分一人で強く生きていかなければならないと深く決心しました。

この日から、彼は野生の山芋や海辺の貝などをさがしては食物にして、暮していきました。毎日のように兄嫁にいじめられていた過去の生活よりも、この方が気楽でした。そのうち、兄夫婦に捨てられたかなしみも、だんだんとうすらいでいきました。

毎日暇があると、彼は家から持参して来た笛を取り出しては海岸に坐って、それを吹きました。彼の笛の音はまるで鈴をころがすようにきれいでした。

ある日、彼はいつもの通り、大きな岩の上に坐って笛を吹いていると、突然海の中から一人の老人が浮び出て来ました。

「子どもさん、あなたの笛の音は何て美しいのでしょう。私のつかえているご主人様のお嬢さんは、いつも海の中からこの笛の音にききほれて、何んとかしてあなたに一目あいたいと思っていますが、お母さんがそれをお許しになれなかったので、憂うつあまり、とう／＼病氣になってしまいました。お母さんはお嬢さんをここまでつれ出すよりも、あなたがうちへいらっして、もっと沢山笛を吹いて、喜ばせてくれるよう願っています。若しそのためにお嬢さんのご病氣が一日で

も早くなおれば、あなたに沢山ごほうびを差上げるそうですが……」

はじめ、急に海の中から浮び出て来た老人をみて、弟はちよつとびっくりしましたが、老人の温和な態度をみて、ひとまずほっとしました。

「お宅のお嬢さんはそんなにまで私の笛の音をお好みですか。それならお手伝いいたしましう。たゞ困るのは、私は海の中へお伴するわけにはいきません、私はすぐおぼれてしましますから」

「それはどうかご心配なく。私がおともすれば、無事に海の中にはいれますから」

「そういわれても……」

「いや、それは私におまかせ下さい。さあどうぞ！」

老人はこういいながら、手を彼の肩にかけて、一しよに海のなかに跳びこみました。不思議なことは、海の中にはいると、立派な大きな道が一つみえました。

二人はその道を少し歩いていくと、山のようにそびえる大きなお城に出合いました。

「これは私のご主人さんの住んでおられるお城でございます。さあ、どうぞおはいり下さい」

老人はこの立派なお城にみとれている彼を促して、一しよに大きな門のなかへはいりました。

豪華な客間に座って、あちこち眺めていると、いつの間にか現れた年とつた夫婦が声をかけてきました。

「よくいらして下さった。お礼をいいます」

みれば老夫婦はともに髪の毛が白くなっていて、相当なお年のようなのに、眼はきら／＼輝き、精神はつらつとして、まるで青年のような元気でした。

老夫婦はいろ／＼彼をもてなした後で、こう話し出しました。

「もうご承知のことと思いますが、わざ／＼ご足労を願ったのは、実はうちの娘を助けてもらいたいからです。必ずごほうびを差し上げますから」

「お話は先ほどお使いの方から詳しくうかがいました。私にできることなら、何でもお手伝いたしましょう」

「それはそれは、何とお礼を申してよいか分かりません。では、早速お頼みいたします」

老夫婦に導かれて、彼はその娘さんの休んでいる部屋にはいりました。そこには真珠でちりばめ、たきれいな寝台があり、美しいお嬢さんが静かに寝ています。しかし、長く病んでいたとみえて、顔色がひどくすぐれません。

彼はそのそばの貝がらでつくられた椅子に坐ると、おもむろに笛を吹き出しました。彼が一曲吹き終らないうちに、今までじっと休んでいたお嬢さんは、急に目をさまし、頭をもたげて帳とじの外を見ました。

「何ときれいな笛の音でしょう。私の病気はすっかりよくなりました」

「おほめにあずかり、光栄の至りです。お望みであれば、いつでもお役に立ちますから」

こうして、彼はお城の中に何日かとまって、お嬢さんのために笛を吹きました。間もなくお嬢さ

んの病氣はすっかりなおったので、彼は老夫婦にいとまごいをして帰ろうとしましたが、お嬢さんはいつのまにか深く彼を愛していましたので、老夫婦は彼がそのまゝお城に残って、お嬢さんと結婚するようにと切に望みました。

陸の上へあがっても、別に帰る家がないので、彼もとう／＼そのまゝお城に残ることにして、お嬢さんと結婚しました。この時、はじめてこのお城は竜宮で、老夫婦は竜王とその後であることが分かりました。

ある日、彼はお嬢さんをつれて、海の中から出て、もと住んだことのあった離れ島へ遊びにいきました。そこでこの新婚夫婦は一匹の巨大な蛇が一人の女をくわえているのをみてびっくり仰天。よく／＼みると、それは昔よく彼をいじめた兄嫁でした。

「助けて！」

兄嫁は手をばた／＼させながら助けをよんでいます。彼は思はずかけ出して、何んとかして兄嫁を助けてやろうとしましたが、その巨大な蛇は兄嫁をくわえたまゝ、海の中を泳いでいつてしまいました。

この時、彼は自分の兄が息せききって舟をこいでくるのをみました。兄は兄嫁を助けるためにここまで追って来たが、とう／＼間にあわなかったのです。

兄弟二人はこの意外なめぐりあわせにびっくりして顔を見合しました。どうして弟が又健在であるのか、それにどうしてこんなお姫さまみたいなきれいな女の子がそばについているのか、兄には